UNHCRと寅さん

2019年12月公開『男はつらいよ　お帰り 寅さん』にUNHCR職員が!?

2018年の夏の終わり、UNHCR駐日事務所にかかってきた一本の電話。「松竹の新作映画の登場人物の一人をUNHCR職員という設定にしようと検討しているのですが…」。その後のやり取りから、それが国民的映画『男はつらいよ』の第50作ということ、UNHCR職員は山田洋次監督の発案ということが分かりました。

関連シーンの撮影現場では、山田監督がご自身の満州引き揚げのご経験と重ね合わせ、世界各地で故郷を追われた難民たちが直面している現状に心を寄せてくださっているのを感じました。

演じるのは23年ぶりにスクリーンに戻ってきた後藤久美子さん。『男はつらいよ お帰り 寅さん』のイズミ・ブルーナUNHCR上級渉外官はどのように生まれたのか―。その裏話を少しご紹介します。

来日した副難民高等弁務官に同行するイズミの記者会見のシーン。UNHCRの旗、バナーなどは、実際にUNHCRで使用しているもの。背景に流れるスライドショーの写真も提供させていただきました。

山田 洋次 監督

「先行き不透明で重く停滞した気分のこの国に生きるぼくたちは、もう一度あの寅さんに会いたい。寅さんの台詞にあるように『生まれて来てよかったと思うことがそのうちあるさ』と切実に願って第50作を製作することを決意した」（2018年秋）

『男はつらいよ』シリーズが始まったのは1969年。50年の節目を迎える2019年、12月27日に公開されるのが、第50作『男はつらいよ お帰り 寅さん』です。

写真提供：松竹

UNHCR職員 イズミ・ブルーナは こうして生まれた！

UNHCRのパートナー企業に感謝状を贈呈するシーン。
山田監督と演技について話し合う後藤久美子さんとスザンネ・シェアマンさん

製作

阿部 雅人さん

Masahito ABE　松竹（株）映像調整部

撮影が始まる約2カ月前、山田監督からイズミをUNHCR職員の設定にしたいと話があり、UNHCR駐日事務所に企画の相談をしました。人物設定、セリフについてなどアドバイスをいただく中で、日本にいながら現地の人たちの顔を思い浮かべてお仕事されているのだろうということを、会話の節々から感じました。

難民支援の最前線、コロンビアで勤務する日本人職員の方にも直接インタビューさせていただき、UNHCRについての理解を深めました。難民問題に対するお考えやこれまでの経歴をお伺いできたことが、製作を進めていく中で役立ちました。私自身、そういったやり取りを通じて、これまで遠い存在だったUNHCRや難民問題を他人事でなく身近に感じながら、撮影に臨むことができました。

今回UNHCRとご縁ができて、難民問題について自分が知り得たことを友人に話したり、どんなに小さくても一つのアクションを起こすことが、何かを変えるきっかけになるかもしれないと考えさせられました。

脚本

房 俊介さん

Shunsuke FUSA　（株）松竹映像センター

これまで『男はつらいよ』シリーズでは、その時々の社会問題をストーリーに反映してきたこともあり、第50作では難民問題、UNHCRは重要なテーマの一つでした。

実は当初、イズミは海外在住のキュレーターという設定でした。でも後藤さんが以前、一時帰国して山田監督と食事をしていた際に「ヨーロッパでは毎日のように難民問題が報じられているのに、なぜ日本ではあまり取り上げられていないのか」といった会話をしたことがあり、その言葉が山田監督に響いて残っていたそうです。

そういった経緯もあり、脚本の直しを進める中で、やはりUNHCR職員の設定がふさわしいということになり、自分でもUNHCRに関連する情報を書籍やインターネットで集めて脚本に反映していきました。後藤さんは、実際にジュネーブのUNHCR本部を見学して役作りをされたそうです。

難民キャンプを訪問したことのあるゆずの北川悠仁さんからも「敵は無関心」というキーワードをいただきました。寅さんがUNHCRの活動に関心が向けられるきっかけの一端を担うことができればうれしく思います。

この人！ 取材に応じたのは

ベネズエラから逃れてくる人々などへの支援を担当しているUNHCRコロンビア副代表の入山由紀子。「松竹の製作スタッフの方々の並々ならぬ情熱、真摯な思いを目の当たりにし感銘を受けました。皆さんの思いと技術の結晶である本作品を鑑賞するのがとても楽しみです」。

イズミ・ブルーナ

車寅次郎の甥・満男の初恋相手。
2人は結ばれず別々の道を歩み、
イズミは海外で結婚して2児の母に。
スイス・ジュネーブのUNHCR本部で
上級渉外官として働いている。

UNHCR職員が実際に使用している名刺やIDカード、
寄付感謝状を作品内で再現していただきました！

衣装

牧 亜矢美さん

Ayami MAKI　松竹衣装（株）

UNHCRという組織がどんな活動をしているのか、この作品に携わるまではまったく想像のつかない世界でした。

職員の皆さんが普段どのような服装で働いているのか、スーツなのかビジネスカジュアルなのか、イメージがわかなかったのですが、UNHCRのウェブサイトなどから情報を得て学んでいくうちに、おしゃれに着飾ったスタイルは選択肢からなくなっていきました。

上司と一緒に来日したイズミが記者会見を行うシーンがあるのですが、世界の難民問題やUNHCRの活動について伝える重要な場面であるため、TPOも考えて衣装はスーツに決まりました。スーツと言っても着こなし方ひとつで違った見え方をするので、そこは苦労しました。インナーはシャツにして、襟はマオカラータイプにすることで、カチッとした中に柔らかさが出て、UNHCR職員として働くイズミの人柄も表現できると考えました。

撮影の時、スクリーンに投影された難民の子どもたちの映像を見て、心が痛くなりました。危険と隣り合わせの地でのUNHCRの活動は、まさに命がけの仕事だと思いました。

UNHCRのナンバー2
副難民高等弁務官役

スザンネ・シェアマンさん

Susanne SCHERMANN　明治大学法学部 教授

学生時代、映画を学問として学べる大学を探していて、早稲田大学に留学するために来日しました。『男はつらいよ』との出会いは1991年。当時のプロデューサーの紹介でドイツ語教師として出演させていただき、第50作でもご縁をいただきました。

イズミがUNHCR職員という設定だと聞き、私はなるほどと思いました。山田監督はこれまでも、作品の中にさりげなく社会問題を取り入れてこられています。ヨーロッパ出身の私にとって、難民問題はとても身近に感じられるものです。

普段は大学で教べんを執っていますので、世界の大きな問題を抱えている国連組織のナンバー2、副難民高等弁務官の役が自分に務まるか不安でした。見た目は大丈夫なのか、どんな話し方をすればいいのか…。撮影現場で山田監督とスタッフと相談しながら役作りをしていきました。

記者会見のシーンでは、山田監督が過酷な難民の現状をお話しくださり、これは監督ご自身が本当に伝えたいと思っていることなんだと感じました。この作品に携わることができたことは、私にとっても大きな財産です。

写真提供：松竹

世界とつながる寅さん

『男はつらいよ　お帰り 寅さん』にも出てくるUNHCR職員ってどんな人？映画の感想と担当業務について、UNHCR駐日事務所の職員に聞きました。

UNHCR駐日代表 ダーク・ヘベカー Dirk HEBECKER

この作品を一言で表現すると“タイム・トラベル”。約2時間の上映の中で、寅さんと一緒に時代を行ったり来たりするのがとても楽しく、不思議な感覚でした。

この作品の中には、日本人の日常、日本の姿そのものが描かれています。日本について深く知りたいと思っている外国人がいたら、ぜひ強く勧めたいですね。個人的には寅さんのユーモア、少し怒りっぽいところが好きです。

実は、難民というテーマがどう組み込まれるのか、寅さんの世界観を壊してしまわないか、少し不安でした。でも鑑賞後、その不安はなくなりました。山田監督、松竹のスタッフの皆さんがとてもよくリサーチして再現してくださり、イズミ・ブルーナは、私がこれまで一緒に仕事をしてきたUNHCRの日本人の同僚そのものです。

イズミを演じられた後藤久美子さんを、いつか日本や世界の難民支援の現場にご案内できる機会があれば、とても素晴らしいと思っています。

“くるまや”での撮影現場を見学したヘベカー。山田監督や後藤さんと、世界の難民が直面する現状や課題についても少しお話ししました。すっかり寅さんファンになった駐日代表の部屋には『男はつらいよ　お帰り 寅さん』のポスターが貼られています！

1現在の担当業務　2日本での課題　3印象に残っているエピソード　4私にとっての寅さん　5第50作を観て

UNHCR駐日副代表（法務）

川内 敏月

Toshitsuki KAWAUCHI

映画の試写会で丸山ゴンザレスさんと対談する川内（右）

1 日本政府や市民社会、弁護士、学者の皆さんなどと連携しながら、日本国内の難民保護・支援に取り組んでいます。

2 難民問題に熱心に取り組んでいる方がいる一方、“自分事”として捉えている人は決して多いとは言えません。国内で関心や理解を高めるためには、さまざまな工夫が必要です。

3 日本の大学で学んでいる難民の学生たちに会うと、懸命に勉学に励んでいる姿に感動します。彼らの信念と情熱は、日本にとって、彼らの母国にとって大きな財産です。

4 海外の事務所での勤務が続き長く日本を離れていたのですが、2年前に戻って来ていくつかの作品を観ました。寅さんからあふれ出てくる人情、日本文化の美しさに、一気にファンになりました。

5 UNHCR職員のように、寅さんがさまざまな場所を旅している姿が出てきて、その試行錯誤する様子がこれまで一緒に仕事をしてきた同僚と重なって、とても身近に感じました。

UNHCR駐日副代表（渉外）

河原 直美

Naomi KAWAHARA

UNHCR難民映画祭でトークイベントの司会をする河原（左）

1 日本の官公庁、企業、大学、市民社会などとのパートナーシップ強化を通じて、難民問題の解決のためのサポート拡大に努めています。

2 難民は紛争や迫害を必死に逃れて来たたくましい人たちだということを伝えられるよう、イベントや映画祭、シンポジウムなどを企画し、難民問題やUNHCRの活動の周知を行っています。

3 日本で活動をご一緒している皆さんには本当に感謝しています。難民問題の解決に向けて熱心に啓発活動などに励んでくださり、こういった方々に私たちは支えられているのだと感じます。

4 子ども時代過ごしたスイスで、毎年寅さんシリーズの上映会がありました。日本文化に触れる数少ない機会で家族でいつも楽しみにしていて、寅さんの名ゼリフを家でまねしたりしていました。

5 昔と変わらない寅さんが、画面いっぱいに出てきて涙が出ました。満男くんがいつの間にか立派な大人なり、イズミちゃんが素敵なUNHCR職員になっていて、とてもうれしくときめきました。

UNHCR The UN Refugee Agency

国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所

〒107-0062 東京都港区南青山6-10-11 ウェスレーセンター

www.unhcr.org/jp/

@unhcrorjp　@UNHCR_Tokyo

2019年12月